
三人の犯罪者

奈森咲良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の犯罪者

【Zコード】

Z2255BA

【作者名】

奈森咲良

【あらすじ】

東京湾の近くに駐車されていた車から男性の遺体が発見される。警察は自殺と判断するが……。

プロローグ（前書き）

新連載です。感想、評価お待ちしております。

プロローグ

乗客の足を促す様に駅構内に鳴り響く発車ベルと駅員のアナウンスを聞きながら土橋は改札機を抜け今か今かと発進を待つている列車へと走っていた。この列車を逃せば次は三十分後だ。しかも三十分後に来る列車は各駅停車で、急行なら十五分程度で着くものが四十分もかかるてしまう。今日は一刻も早く家へ帰つて体を休めたい気分なのだ。

土橋は警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策五課に所属する警察官である。組織犯罪対策部は読んで字の如く組織的な犯罪を取り締まりする部署で、暴力団事犯等も彼等の担当となることが多い。土橋は今年で四十になるが、警察官になってこれまで大きな手柄を立てたことはない。だが土橋自身としては自分の働きがもつと評価されても良いはずだと常々思つていた。自分は今まで仕事を何よりも優先し、家族という代償を払つて日本警察の為に尽力してきたつもりだ。しかし、自分の働きは何時までも評価されはしない。最近じや年下の男に階級で上をいかれてしまった。屈辱的だった。見返してやりたい。自らの存在を警察に認めてもらいたい。土橋は何時しかそんな考えを持つようになつていた。

* * *

自宅からの最寄り駅である緑台駅に着いたのは午後十時頃だった。何とか列車に乗り込むことが出来て、遂にし方到着したところだ。駅から自宅のマンションまでは歩いて十分程。土橋はその道のりを重い足取りで歩きだそうとしていた。

(……ん)

駅を出たところでふと土橋は足を止めた。視線の先には一人の男女が居て土橋の視線には気づいてはいない様子だ。

(……どうして)

土橋はしばらくそこに立ちすくんでいたが、やがて男女が歩き出すと自然と動き出していた。男女は土橋の自宅とは正反対の方向へ歩いていくが、土橋の足は躊躇なく男女の後を追っていた。早く帰宅しようとしていたことなど既に頭には無かった。

第一章・警察官の死（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。

第一章・警察官の死

東京湾から車で十分程走ったところに「バリー」という名の洋食屋がある。そこが金山優子の勤務先であった。金山が「バリー」でアルバイトとして働き出したのは一年前、彼女が二十歳の時である。「バリー」は彼女の自宅から車ですぐの場所にあり、更に給与もそこそこ良いとあって求人広告を見た金山は即決でここを勤務地として選んだ。元々接客には慣れていたから仕事もすぐに覚えられただし職場の雰囲気も悪くない。金山は「バリー」が好きだった。

今日十月十日は金山が掃除当番の日であった。当番の人間は開店前誰よりも先に店に入り店内の掃除をしなければならないのだが、この作業がなかなかしんどいもので一週間に一度の当番の日は少し憂鬱な気分になるところが正直なところある。掃除当番は一人一組制。金山が店に着いた時関係者専用駐車場に既に車が一台止まっていたのでもう一人が既に来ているのだと思い、彼女は少々急ぎ足で店の裏口へと歩いていった。

「あれ？」

てっきり鍵が開いているものだと思つてドアノブに手をかけた金山だつたが思いに反して扉は開くことを拒んだ。どうやら鍵が閉まっているらしく、何度かガチャガチャと動かしてみるが扉は開かない。妙に思いながら金山がバックから鍵を取り出そうとした時、後ろから車のクラクションが聞こえてきた。金山がそれに反応して振り返るとそこには既に到着していると思っていたもう一人の当番の女性が車で出勤してきたところであった。

「おはようござります」

車から降りてきた女性が挨拶をした。彼女は金山より一つ年上で名前は田村といひ。とても真面目な女性だ。

「おはようございます。田村さん、今来られたんですか？」

「え？ええ。そうですよ」

変なことを聞く。という顔を田村はした。

「私、てっきりあの車が田村さんの車だと思って、もう来ていました」とやるんだと思つてました

そう言われて田村は駐車場入り口付近に止められている黒の車に目をやつた。

「あれ、あの車金山さんのはじょないんですか？」

「違いますよ。私のはあっちです」

「……じゃあ、あの車誰のなんでしょう

ここは関係者専用の駐車場である。基本的には店で働く人間しかここには止めないのだが、今日この時間には自分達しか来ていない筈だ。一体誰が止めているのだろう。

と、その時金山が車の中に誰か乗っているのに気がつく。運転席で眠っている様子だ。一人は好奇心に駆られ車に近づいていった。

「誰か寝ですよ」

車内では中年の男性が運転席で眠っていた。一人共面識はない男性だ。金山が運転席の窓ガラスをノックして男性を起こそうとしたのだが男性に反応は見られない。やがてじつと男性を見ていた日村の顔がだんだん青ざめていった。

「…………金山さん。こ、この人、息してませんよ」

「えっ？」

二人は思わず反射的に車から離れていた。

* * *

警視庁捜査一課に出動命令が出たのは午前八時前のこと。ちょうどその時出勤してきた高木渉は一息つくまもなく部下の大山と現場へ直行することになった。

警視庁捜査一課強行犯捜査三係の警部である高木渉は今年三十三歳。六年前に結婚し、現在五歳になる娘も居る。ただ刑事という職業柄、あまり一緒に居てやれる時間は少ないので娘がそれに対する文句を言ったことはなかつた。五年前、娘が生まれてすぐに高木の妻・美和子は交通事故でかえらぬ人となり以来高木は男手一つで娘を育ててきた。母親が居ない寂しさもきっとあるはずなのに娘がそれを口に出すことはない。そういうところは母親にそっくりだった。

「警部、着きましたよ」

大山に言われて高木は我に帰つた。既に車は現場に到着していて周囲にはパトカーが数台止まっており物々しい雰囲気を醸し出してい

る。一人は車から降り立ち入り禁止のテープをくぐつて中に入った。

「状況は？」

鑑識の男性に聞いた。

「亡くなつた男性は、車内で練炭を焼いていました。一酸化炭素中毒により死亡したものと思われます」

「自殺ですか？」

「まだわかりませんが、その可能性が強いかと」

車の中を覗き込んだ高木は後部座席に置いてある練炭を発見する。車の窓は閉め切られていたらしく自殺の可能性が高いと現場鑑識は判断していた。

運転席で亡くなっているのは四十歳ぐらいの男性だ。ふと高木は男性の顔を見て何かに気づいた。

「どうかしましたか？警部

「……この人」

男性は警視庁組対五課の警部補、土橋康隆であつた。

第一章・高木の依頼

米花駅周辺には雑居ビル等が多く立ち並んでいる。小さな会社だつたり新聞社だつたり駅を一歩出れば嫌でも看板が目に留まるだろう。「工藤探偵事務所」はそういう一角に居を構えていた。

三階建てのビルの一階を借り探偵事務所を開設したのは一年前のこと。大学を卒業した工藤新一は念願だつた自らの事務所を持つと同時に正式に私立探偵となつたのである。

しかし、正式に探偵となつてからの新一は以前の様にメディアへ露出することもなければ警察から捜査協力を依頼されることも無くなつていた。勿論ゼロという訳ではないが、それでも七年前に高校生探偵として活動していた頃と比べると明らかに減少はしているだろう。元々私立探偵が殺人事件の捜査に加わるなどということは有り得ないことで七年前が変だつたと考えることも出来るのだが、それについてもこのあまりの関係の変化には何か裏があるのではないか。そう考える人物も少なからず居ることも確かだつた。

この日新一は午後から探偵事務所を開け米花駅近くにある喫茶店に入った。ここで人と待ち合わせをしているのだ。新一が店に入るとその待ち合わせ相手は店内の一番奥の席に座つていて、新一に気付くと席から立ち上がり声をかけた。

「やあ、ひつちだよ」

人懐っこい笑顔を新一に向ける男性は警視庁の高木涉であった。

* * *

新一が高木とこうして会うのは三ヶ月ぶりである。高木は警視庁に勤めながらも新一には協力的な人物で、高木が時折捜査協力を内密に依頼することがあった。七年前はどこか頼りなげに見えたこの男も今や警視庁捜査一課の警部だ。まあ相変わらずの弱気な部分は以前と変わらないが、そこが彼の良さでもあるのだろう。高木と向かい合いに座つた新一は注文を取りに来たウエイトレスに「いつものやつ」と頼んだ。この喫茶店は探偵事務所からも程近く、新一もよく利用するのでこれで充分通じるのである。

今回も新一を呼び出したのは高木の方だ。昼食を摂っている時に電話があり約束を取り付けてきた。幸い、午後から予定は空いていたので了解したのだが、どういう事件捜査をしているのか新一には全く心当たりが無かつた。眼下のところ、警視庁管轄内で殺人事件発生のニュースを新一は目にしていない。しかも部下の若い男性を引き連れず一人で居るというのも妙に引っかかる。そんな新一の考えを見透かした様に高木は口を開きだした。

「実はね、今日は殺人事件の捜査協力というわけじゃないんだ」

「……と、言いますと？」

「うん……。捜査協力依頼は間違いないんだけど、殺人事件ではないんだよ」

新一は思わず目を丸くした。どういうことか状況が上手く呑み込めない。

「まあ、つまり。自殺案件なんだ。警視庁が自殺として処理した件の捜査協力をしに来ただよ」

高木はその案件の概要を新一に説明した。

* * *

事の始まりは一日前の十月十日。東京港から歩いて十分程した場所にあるレストラン「バリ」の関係者専用駐車場に止められていた車の中から男性の遺体が見つかった。男性は警視庁組対五課に勤める土橋康隆警部補四十二歳。死因は一酸化炭素によるもの。車内では練炭が焼かれ、車の窓も完全に密閉されていたことから警察は自殺だと判断したのである。

しかしここで一つ疑問が生じた。自殺の動機である。車内から遺書らしきものは発見されず自宅等も調べたらしいのだが自殺の動機と呼ぶに相応しいものは全く見つからなかつた。更に土橋が所属していた組対五課の人間も彼が自殺するとは到底思えないと皆口を揃えている。土橋は亡くなる一週間前に密輸拳銃を摘発するという手柄をあげており、ますます自殺する理由が無いではないかと捜査陣は色めき立つた。その結果、土橋の遺体は司法解剖に回され殺人の可能性がないか調べたらしいのだが、怪しいところは見つからなかつた。強いて言えば土橋は亡くなる前に睡眠薬を服用していたことがわかつたのだが、それも土橋が苦しまずに命を絶つ為に飲んだものだとされ、結局当件は自殺として処理されたのである。

が、しかし。高木はこの判断にいまいち納得がいっていなかつた。

高木も土橋という男がどのような人物であるかはわかっている。部署が違うとはいえ顔見知りだし、例の拳銃摘発で彼は一躍警視庁内での有名人となつたのだ。そんな人が自殺などすることは到底思えない。それに警察は結局動機不明のまま捜査を終了してしまつてゐる。動機がない自殺には犯罪が隠れているものだ。高木は自ら立ち上がり

り捜査続行を上司に進言したらしいが当然受け入れられる筈もなく、残る最後の頼みの綱である新一に協力を頼みに来たのだといふ。

「…………」

高木の話を終始無言で聞いていた新一は話が終わつたと見るや静かに口を開いた。

「土橋警部補の血[サザン]だらりじょ」

「……えつ、ああ。縁台の方だけビ」

「では、車を廻して頂けますか。高木刑事、車で来ますよ」

「……ああ。じゃ、じゃあ引き受けてくれるんだね」

「ええ。僕もちょっと興味が湧いてきたので、調べてみたくなりました」

そう言つと高木は嬉しそうに席から立ち上がりテープルの伝票を取るとレジで会計を済ませ、すぐに近くの「コインパークリングへと車を取りに走つていった。

その後ろ姿はお小遣いをもらつてお菓子を買ってに出掛ける子供の様に見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2255ba/>

三人の犯罪者

2012年1月8日18時45分発行